

||||||| 記 事 |||||

例会記録

- 平成20年4月例会 平成20年4月26日(土)
 順天堂大学医学部9号館2階8番教室
1. 大正期労働市場と疫病: 1914年発疹チフス流行
 永島 剛
 2. 漢字文化圏の中国医籍受容史
 真柳 誠

- 平成20年5月例会 平成20年5月24日(土)
 順天堂大学医学部9号館2階8番教室
1. 新刊の医家肖像集(杏雨書屋)
 天野陽介, 町泉寿郎, 小曾戸洋
 2. 方伎雑誌の訳注研究
 寺澤捷年

例会抄録

貝原益軒 未公開『用薬日記』の養生処方

山崎 光夫

貝原益軒(1630~1714)といえ、『養生訓』や『大和本草』『和俗童子訓』『慎思録』『文武訓』『楽訓』『黒田家譜』『筑前国統風土記』などの著者として知られる。その内容は、儒学から、本草学、医学、地理学、農学、文学、歴史学までに及ぶ。

かのフォーリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796~1866)をして、「日本のアリストテレス」と言わしめた、博学多識の人物である。

著作は、98部247巻に及ぶ。が、なんといても『養生訓』が有名である。益軒といえ、『養生訓』であり、『養生訓』といえ、益軒である。そして、『養生訓』の養生術を自ら実行し、幼少のころから蒲柳の質ながら、85歳の健康長寿を獲得した。

『養生訓』(全8巻)は益軒自身の体験を踏まえ、仮名まじりの和文で書かれた庶民向けの健康啓蒙書である。益軒が83歳のときに執筆し、翌正徳三年(1713)、84歳のときに出版された。死の前年である。この『養生訓』は益軒の「民生日用」——日常生活に役立てるの精神のもとに書かれた書物である。

『養生訓』に先立つこと、30年前、益軒は“プ

レ養生訓”とでもいべき『頤生輯要』(全5巻)を、天和二年(1682)、53歳に著している。古来の医学書より、摂生及び療病に係る事項について、格言・警語を選択して集録した書で、門人の竹田春庵が編集した。サブタイトルに「一名益軒先生養生論」とあり、構成や内容は後年の『養生訓』を彷彿とさせる。

その益軒がみずからの健康をどう図ったかを知る上で恰好の資料がある。『用薬日記』である。だが、その存在は知られていたが解読はまだされていなかった。

このたび貝原家の承諾を得て撮影し、その全容を読み解いたので発表する。三百年余の時空を経てここに『用薬日記』が公開されるのである。益軒自身のプラベートな用薬法が記述されている。現在でもなお読み継がれている『養生訓』を、さらに詳しく理解する上で新しい資料となるだろう。『用薬日記』の書かれた日付は以下の通り。

「上巻」——宝永四年(1707)正月・益軒、8歳から宝永六年(1709)2月・益軒、80歳まで、56枚。